

# 未来への伝承

## 大和朝廷とのつながりを示す？

## 武者塚古墳出土 鉄柄銅杓(国指定重要文化財)

武者塚古墳は、桜川左岸の台地上に造られた、7世紀(古墳時代終末期)の古墳です。1983(昭和58)年、旧新治村の村史編纂事業として行われた発掘調査によって、その全容が明らかになりました。発掘調査は筑波大学の調査団によって行われ、古代人の髪型である美豆良みずらに結われた頭髮といった、学術的価値の高い遺物が数多く出土し、大きな話題となりました。

現在、石室は覆屋の中に保存されており、出土品は2014(平成26)年に国の重要文化財に指定され



武者塚古墳前室の遺物出土状況  
(筑波大学考古学研究室提供)

ました。今回ご紹介する鉄柄銅杓は、この武者塚古墳出土品のひとつです。

この遺物は銅製の本体と鉄製の柄えからなり、高さ8・3センチ、全長45・6センチ、幅20・5センチをはかります。本体は所々に槌つちの痕跡が残り、外方に1センチほど突き出す片口かたぐちを有します。本体の縁は外に折り曲げられて平らになっています。柄は厚さ6ミリで、先端を6センチほど下方に折り曲げています。銅製の鋌びょうで本体と接合しており、鋌は本体側から打たれています。柄には所々に繊維の付着が認められ、帯状の布が巻いてあったと考えられます。本品は柄香炉えいこうろや火熨斗ひのしを思わせますが、片口の存在や底部の形態から杓と考えられます。

この鉄柄銅杓は全国的にも珍しく、古墳時代から奈良・平安時代の出土例としては、日本全国でも6例しかありません。その中でも武者塚古墳の鉄柄銅杓は最も古いものの一つで、ほぼ完形を保った貴重な資料といえます。

それでは、この遺物は一体何のために作られ、どうやって使われたのでしょうか?もちろん実用品と考えれば水やお酒をすくう道具なのですが、仏像が持つ杓と類似していることから、仏教の影響の下で製作された仏具とする説もあります。武者塚古墳の造営当時、大和朝廷では仏教の受容が進んでいましたが、常陸にはまだ伝わっていなかったでしょう。



武者塚古墳出土 鉄柄銅杓(梅原章一氏撮影)

武者塚古墳の鉄柄銅杓が仏具だとすれば、仏教を信奉していた大和朝廷の権威を象徴するものとして、被葬者に下賜されたものだったのかもしれない。

今回ご紹介した資料は、特別展「武者塚古墳とその時代」において、11月末まで考古資料館にて展示中です。ぜひご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎026・7111)